戦旗

一九六〇年十一月一日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
TEL (341) 8481
編集 発行人 鏑木 潔
一部 拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
振替番号東京一二一〇四番
定価 一部 十円
月 四〇円 半年 二四〇円
送料五円 送料三十円

労働者の犠牲の上にたつ

「福祉国家」への道とはなにか

……構造政策の底を流れるもの……

国会が解散になつた。既成のすべての政治勢力と諸潮流は、ブルジョアジーからプロレタリアートの代表と称する党にいたるまで十一月二〇日の投票日にむかつて、しのぎをけづり始める茶番劇が「民主主義」の装いをして展開されている。十一月二〇日の「権利」行使によつて「国民」の運命がきまると。だが、総選挙後における才二次池田内閣の成立と登場は、二〇日の投票を見ずしても殆んど確定的である。生産過程において資本と対決するプロレタリアートの斗争によつてではなく、分断された一市民の投票＝選挙斗争にすべてをかけるような一切の幻想をたちきるためのわれわれのなすべき任務はなにか。五〇年代における高度な資本蓄積と成長率を誇りつつ「永遠の繁栄」プロレタリアートの「永遠」の賃金奴隷化を夢みる日本ブルジョアジーの意図をこの選挙戦のなかで徹底的に暴露し、革命的プロレタリアートの結集を主体的におし進めることでなければならぬ。それはまた同時に、一切の「民主主義」的イデオロギーにたいする斗争でもある。

（一）

民間人や学者、評論家および政府職員ら二百五十人以上動員し、一年近くかかつて経済審議会がまとめあげた「国民所得倍増計画」案が二十五日発表された。それは、三五年度経済白書九月に池田内閣の発表した新政策――十年間の所得倍増、ここ三年間の経済成長率九％、「福祉国家」「完全雇用」「高度生活水準」の実現など――をさらにうらづけるものであつた。「わが国経済はここ数年来、著しい成長をとげた。どくに昨年度は一七％という目ざましい拡大をしめし、本年度に入つてからもおおむね順調に推移し、予想以上の拡大が期待されている。……政府の施策よろしきをえれば、今後もそれに劣らない成長を生みだすにちがいないし、その成長をささえる条件にもめぐまれている」と才三六臨時国会の施政方針演説で池田が自信をもつていきる時、それをあながち単なるデマゴギーとして片づけるだけでは問題の本質をなにひとつとして明確にしえない。

所得倍増計画の路線の基本はなにか。それは、①機械工業を〃戦略産業〃とする産業構造の高度化、②集中合併などによる企業規模の拡大、コンビナート化、専門生産による量産体制、③大企業と中小企業の協調④太平洋岸ベルト地帯を中心とする重点的産業生産の促進、⑤最低賃金制と職能的賃金および労務管理制度の確立、⑥産業別労働組織への転換、であり、かかる事を中心に、国民総生産の十年後の到達目標を二十六兆円と設定するものであつた。衆知のとおり、「産業構造の高度化、近代化」がしきりと強調され、ブルジョアジーの側からも日本資本主義の「二重構造」の解消が叫ばれ、そのためにブルジョア・イデオローグが一斉に総動員されているのには一定の根拠がある。「三四年度に景気過熱を招くことなしに急テンポの段階を上ることに成功した日本経済が先行最高成長の一つの踊り場を迎えることを一概に否定できないような状況になつてきた」と経済白書も認めざるをえないように通貨交換性の回復、貿易、為替の自由化という戦後世界資本主義の再編強化の有力なテコとなつてきたドル支配を中心とする管理貿易体系の崩壊は、五十年代後半における世界資本主義の好況局面のもとでの新たなる転換点を意味するものであつた。そして資本移動の自由化にともなう金利水準の平準化は、資本相互間の国際競争を激しくさせるばかりでなく、景気循環過程の同時性をも回復させ、生産過剰にもとずく恐慌要因の成熟に導いている。今日日本資本主義にとつての至上命令とされている〃産業構造高度化〃は、まさにかかる世界資本主義の局面を背景に、米、英、仏、西独などの資本主義圏に伍してひけをとらないだけの基盤を構築する意図をもつてうちだされてきている以外のなにものでもなく、三四年度の高度成長率を背景に機械工業を中心として重化学工業化を推進しているのも以上の理由によると云なければならない。しかも、所得倍増計画、経済白書、池田の新政策などが一致して唱いあげている産業構造の高度化の強調は、単に国際競争戦にうちかつということだけからではない。日本資本主義それ自身にとつての内的必然性をもつているのである。戦後日本資本主義、とくに五〇年代後半における急激な生産力の上昇と資本の蓄積がなしたのは日本資本主義固有の二重構造と低賃金にも由来するが基本的には次の理由にもとずいている。一九三〇年代以降、その間に才二次大戦をはさみ、設備更新をなしえず、固定資産が老朽化している中で五〇年代において固定資本の更新が進んだ事及び電機産業等の新たなる産業の発展による設備投資が進められた事にもとづいていた。それは国家独占資本主義下における経済政策によつて支えられてきたなどという事や、また日本帝国主義の強靱性というようなことによつて説明するのではなく、まさに資本主義そのものの自己展開に他ならないのである。そして今日、六〇年代になつて「機械工業を産業構造高度化の〃戦略的産業〃として重点的に伸ばす」ということを中心に「中小企業も資本設備をふやして生産性をひきあげるよう」にし、農業人口を鉱業人口にわりあて「農業革命と工業高度化が結合した形で経済構造の変革が進められる」と強調することは、まさに設備投資と技術革新そのものによつて推進してきた日本経済の高成長がひとつの壁にぶつかつたことを意味している。つまり、一九五〇年度に比し、日本資本主義の最近の鉱工業生産は約二倍、しかも機械工業のそれは約四倍になつた。だがその結果として鉱工業とくに機械工業における労仂人口の急速な拡大が生れ、労仂力とくに技術者の不足は深刻な問題となつてきた。そして拡張した鉱工業生産を背景に、貿易の面でも「機械を中心とする重化学工業の輸出」に転換し、日本資本主義の膨張にとつての不必要な手足を切りすてていかねばならない必然性に見舞われたのである。重点的産業立地の促進とか、最低賃金制とか二重構造の解消とか、脱農化とかいつているのはまさにかかる理由にもとづいている。最近流行の「構造政策」とはまさに日本資本主義のかかる現局面にもとづいてうちだそうとするブルジョアジーの「政策」それ自身の表現なのであり、ブルジョア・イデオローグの稲葉秀三が「国際的競争力をもちえない農業、鉱業の二部その他をいつまでも保護していくという政策は即時にでも方向転換していくことが必要である。」と強調することは、ブルジョアージの意図を極めて忠実に代弁しているものといえる。

（二）

構造政策にあらわれる重化学工業中心への再編成、それは現実に進行している諸過程でもある。例えば、原料費の割高によつて化学工業製品は国際的に割高となつているが、貿易、為替の自由化により国際競争力を強化するためには、鉄鋼業のコークス炉ガスあるいは高炉ガスを利用し、製鉄、化学コンビナートを形成することによつてその解決をはかろうとしていることなどはその端的な表現であり鉄鋼業における系列化関連産業との連繋化の強化、促進は、かかる意味をもつてうちだされてきているといえる。そして原料―輸送―鉄鋼加工品―流通の一貫体制を確立することを追究し、そのために製鉄、化学工業のコンビナート化や、鉄鋼業と建設業との結びつき、機械、造船、自動車化学、鉄鋼、海運などの結合が現実に進められていつている。その上、戦後の日本資本主義の再建強化が他人資本に依存して行われた結果、銀行資本を中心とする新たなる系列化が促進されていつている。そして機械工業の量産体制を確立するために、「中小企業の近代化」（つまり不必要な部分をきりとり、独占への系列化、集中をはか）をおし進める。

だが資本主義にとつての「病気」ともいえる過剰生産恐慌の要因は次才にその内部において形成されてきている。五〇年代に於る固定資本更新の局面に終りをつげ、好況局面の繁栄のさなかに産業構造の高度化に着手せねばならぬところにこそ資本の自生的法則が貫かれている。しかも、日本資本主義にとつての最も密接な関係にあるアメリカ資本主義に不吉な兆候がすでに現われ始めており国民総生産は明らかに六〇年の才3四半期以降停滞を示し始めており、その上、英、仏両国においても、輸出の減退から生産の低下が始まつている。ブルジョアジーの意図する〃新資本主義〃は暗いヴエールにおおわれながら進展しているのであり、それ故にこそますます国際競争戦にうちかつだけの経済的基盤の確立が要請されていることを知らねばならない。それは、「革命の通達」派がいうように、整理政策が破綻して経済危機にいたるなどという宙に浮いた本来転倒の議論がいかに資本の法則を無視しているかを物語るものである。そして、また、「プロ通」派の前身である旧政治局理論（日本をめぐる情勢と来るべき階級決戦について）のように、労仂力が不足し、賃金が上昇し、利潤率が低下するが故に、恐慌が成熟し階級決戦が訪れるなどといつて、客観主義的言辞を流すばかりでなく、「一般的」に賃金が上昇するというようなことをのべたててプロレタリアートの資本にたいする憎しみをかりたて対抗関係を明らかにすることを全くいんぺいするブルジョア経済学への転落と弁護論にはわれわれは全く無縁である。

さらにまた、ブルジョア、イデオローグからも「共産党や社会党や総評は、終身雇用制や農業保護政策の主張者である。また貿易自由化や為替自由化に反対する勢力になつている。……経済成長が促進されてくるとかれらはむしろ封建的な勢力や運動を展開する立場に自らをおいていくのではないだろうか」と皮肉られているように、単に自由化に反対し、中立日本の経済政策を対置させるだけで資本主義社会そのものの矛盾をぬりつぶすような社会党、共産党ともわれわれは無縁である。そして企業別組合の中に労仂運動分裂の要因をみ、「産業別組織」への転換のみを馬鹿のひとつ覚えのように繰返し、アメリカ式労仂組織、AFL、CIO型の資本の番犬となる産業別組織に日本労仂運動を産業構造の高度化とともに転換させようとする資本の意図をなんら見ぬこうとしない総評民同ともわれわれは無縁である。

われわれにとつて今日、重要なことは、日本資本主義の自己展開のなかから必然的に導きだされている資本主義のこの局面の本質を徹底的に暴露し、資本主義そのものを打倒することなしに、プロレタリアートの解放もありえないことをすべての政治勢力が総選挙のなかでの「政策」論争に明け暮れている以上、徹底的に宣伝することでなければならない。そしてプロレタリア革命を遂行するための革命的主体、革命的プロレタリアートの結集のために、一切の非マルクス主義的、小ブル的潮流にたいする原則的態度を確立することである。それは現時点におけるプロレタリア党建設のための斗争の具体的、実践的任務として規定される。

十一月総選挙の意義はなにか（下）

我々はそれに対しいかに斗うべきか

（一）

第一の「選挙戦」について検討してみよう。

今度の選挙は「争点のない選挙」といわれている。安保問題はすでに争点となつていない。選挙は自民党の「新政策」への信任投票といつた形で進んでいる。自民党は、九％成長理論によつて、「資本主義による、理想的発展と幸福」をうちあげている。「社会主義圏をはるかにしのぐ生産の発展の事実のうえに景気を大きくすれば、分け前も多くなる」というブルジョア理論の宣伝は、単なるデマでなく、産業構造の全面的刷新とそれを支えるすべての政策によつて裏付けた日本資本家階級の当面の目標なのだ。

だが、彼等はこの輝かしい資本主義の主義の発展が一方において労働者階級に過酷な犠牲を強い（石炭産業における大規模な首切りを見よ！三十五万の炭坑労働者は実に半分以上がヤマを追われ、残つた者は三倍もの増産を強いられている）自然発生的にせよ意識的にせよ、労働者階級の反乱をよびおこすことを知つており、他方資本主義の必然的矛盾である不均等発展や過剰生産を一層深化させ、国際競争にも重要な矛盾を育てることを知つているがゆえに、それを出来る限り有利に解決するために「新政策」を打出しているのだなによりも資本主義への幻想を深くうえつけ、資本主義自身の矛盾を労働者の目から深くかくすために、「新政策」の選挙カンパニヤとそれによる「勝利」は有効であり、そのうえに作られる保守安定政権は、労働者階級の反抗を巧みにつぶし資本の矛盾を出来る限り調整するためになくてはならぬものなのだ。

これに対する労働者人民の戦線は、民社党をのぞいて安保斗争の高揚のうえにのつているものの、明確な対決を何らなし得ていない社会党は安保問題をふりかざすのが大衆をとらえ得ないと見るや、「牛乳三合」に代表される卑俗な経済主義に随落し、自民党の「夢多い」新政策に対しどちらが革新か判らないものにな

（以下二面に続く）

赤雷

☆これは分派斗争のひとつのエピソードである。十月某日、京浜南部地区委員会が開かれた。その時、戦旗派の立場とその意義を説明し、討議にふして貰わんとして青山田川、川崎、山崎の四名がおもむいていつた。☆南部の一部の同志たちは戦旗派を粉砕するという。誠に結構な話だ。われわれも戦旗派などが一刻も早く否定され、その上にたつて革命的前衛党の基礎が構築されることを願つている。☆会場について案内を乞うや否や南部のA君は奥から脱兎のごとくかけだしてきた。そしていきなりポカポカの連続。あつけにとられてあいた口がふさがらないのは四名の同志たち。そこをまたポカポカが始まつたので眼鏡はとばされ、口びるから血を出すものまででた。理由をたづねると問答無用。☆われわれは暴力一般を否定するものではない。そして批判の武器は武器の批判にとつて代えられる必要のあることも知つている。南部の同志たちは、それを忠実に実践して戦旗派を粉砕したらしいが、それ故にこそ、分派斗争のエピソードとして記録しておく価値がある。

「革命的傳統」を美化する

同盟内の左翼スターリニストへの回答

田川和夫

日和見主義者が、われわれにむかつてありとあらゆるレッテルを貼りつけ、中傷を浴せかけ、犬の遠ぼえみたいにわめきたてることを、われわれはなにひどつとして恐れはしない。むしろかれらがそうすることによつて革命的プロレタリアートの眼の前にかれらの姿を明瞭に浮び上らせるものである以上、われわれは却つてそれらのわめき声を歓迎しさえする。

われわれが「戦旗」派として自らを体現してからすでに半月以上を経過した。だがその半月間は、第五回大会を契機に始つた同盟の危機的状況のなかにあつて、問題の本質的究明を開始し始めている全国の同盟員諸君から歓迎の言葉をもつて迎えられた半月間であつた。われわれのもとには、連日電話で、電報で、手紙で速達で全国の同盟員諸君、地方組織から「戦旗」派のもとに結集すべき決意が次々と寄せられてきている。

そしてわれわれの出発点と立脚点の革命的意義をなにひとつとして理解しえない大衆運動埋没論者、組織論におけるスターリニスト、理論上における客観主義者、実践上における主観主義的急進主義者たちが、いかにヒステリックな叫びをもつてわめきたてようとも、圧倒的多数の全国の組織と同盟員諸君が、われわれの下への結集を開始し、われわれの発したアッピールがプロレタリア党建設の斗争の全面的検討にとつての重要な契機となりつつあることをわれわれはいまや誇りをもつて同盟内外に表明することができる。だがもちろん、われわれはそのことをもつて決して自己満足に陥入つてはいないし、またわれわれの任務がなしとげられたとも考えていない。むしろわれわれは、極めて不十分にしかいままで展開してこなかつたわれわれの立脚点そのものを全面的に明らかにすることによつてさらに前進する数歩をかちとりたいと考えている。そのためには当面せるわれわれにとつての中心的任務として存在するプロレタリア党建設のための斗争の意義と役割を否定する同盟内の一切の潮流にたいするわれわれ自身の原則的な態度をますます鮮明に、明瞭にしていかなければならない。

最近、京浜南部地区の一部の同志たちが、「戦旗」派の打倒の旗印を明瞭にかかげ、組織的にも結集を開始した。わたしは、かれらが南部地区委員会の名を使つてその決議とアッピールを発表しようとしていることをなんら非難しようとは思わない。旗印を明確にすることによつて事態の混んさを救つてくれることを考えるならば、喜んでさえいる。たしかに南部の諸同志たちは、第五回大会において積極的な役割を果したし、旧政治局の路線をくつがえし、同盟を革命的前衛党に脱皮させるための契機をつくりだす有効な役割を演じたことをわたしは決して過少には評価しない。だがいついかなる時でも自分たちが主役を演ずることができるかのような錯覚にとらわれ、鼻もちならぬうぬぼれをしめし始め、スターリニスト流のデマゴギーと大言壮語をふりまく時、彼らにたいしする明確にして原則的対決をしないわけにはいかない。

南部の一部の同志たちが、『戦旗』派打倒を決意したのは次の理由からである。すなわち、①陰謀をたくらんで同盟の諸機関を私物化することは民主的でない。②諸分派にたいする批判ばかりで戦旗派の中味はなにもない。③同盟の革命的伝統を否定し、基本的な活動と成果を否定している。④斗いのなかで同盟をつくるということを放棄している⑤革共同全国委員会派の秘密党員によつて戦旗派中央は握られている……と。

まともに考えるならばこれらの理由は誠に空虚なたわ言であることがすぐわかる筈だ。同盟中央が解体したことにたいし憤激し、非難を浴せかけるのは自由である。だが、それ程かれらが憤激するのであるならば、「革通」派や「プロ通」派の諸君たちが真先に政治局を解体させていつたことにたいしてなんらの憤りをも示さないことは奇妙な現象ですらある。だがそのことは問わないことにしよう。

問題の核心は、同盟の「革命的伝統」を否定する云々の美辞麗句とコケオドシにあるからだ。彼らが発表しようとしている決議草案はいつている。「『おくらされてきたプロレタリア世界革命にとつて諸条件が成熟している』『客観的には完全に成熟している日本プロレタリア革命』という共産主義第一号の主張をプロレタリアートの中に革命的中核がないことを理由に否定している。その上彼らは、客観的な革命の条件が成熟しつつあるにもかかわらず前衛が欠如しているという正しい認識に基づいてあらゆる既成の左翼から組織的に独立して、建設してきた同盟の基本的正しささえも……否定し去る」と。これこそ笑うべき主観主義の発露の見本である。彼らは今日の現時点においても革命の客観的条件が成熟しているとでも考えているのだろうか。革命を漫画化し、茶番化する彼らの頭の中には当然そのように五八年以降の現情勢が写つているらしい。だがわれわれがのべたように客観的条件の成熟とは、プロレタリアートが**なんらかの形で**現状を変革せねばならない状況に追いこまれ、資本にたいする斗争に立上るような資本主義の危機的状況のもとでのみ語りうるのであり、それを革命にむかつて勝利させるためには強固な革命主体（量的多数をいうのではない）が建設されていることが必要不可欠の条件である。戦後日本資本主義のもとにおいては、四五－七年の危機のみが客観条件の成熟を語りうるだけであり、それを延長しいつでも危機をふり廻すことは万年決戦論に道を開くことになるとわれわれがたえず主張してきたところではなかつたか。われわれがいま問題としなければならないことはまさにかれらの表現のなかに見出される「安保－三池－浅沼暗殺」というように情勢を定式化し、「革命的前衛」が決起しさえすればなにごともなしうるという笑うべき小児病そのものであり、それが同盟創立の立脚点そのもののなかにかくされているからこそわれわれはなおかつ深いメスを入れねばならないのである。だが「理論」を実用化し、「革命的実践」を矮少化する主観主義者たちはわれわれにむかつて次のような非難をなげかける。「浅沼暗殺にたいする民同指導による労働者大衆のエネルギーの発散が行われているとき、**そのときに！**この斗いにちようぜんとしている如く、分裂の基本的要因は……」と。つまり、浅沼暗殺にたいしてなにもしないで分裂の要因を指摘していたのはけしからんということらしい。十月十一日の時点で。なんと妙なことではないか。浅沼暗殺が池田内閣の政治攻勢のあらわれだという彼らの論理の誤謬は指摘するまでもないが、十月十一日に浅沼暗殺にたいして超然としていたというにいたつては彼らはまるで神業の極意でも心得ているのだろうか。われわれは唯物論者である限り、かかる観念の遊戯が恰かも革命的であるかのような茶番とは無縁である。

さらにかれらはいう。「我々の多くはまさに安保斗争の中で同盟に結集してきたのであり、世界革命の思想と理論に同調して結集したのだ」それに故に、共産主義第一号にあらわれている「基本的正しさ」を否定する一切の傾向と斗うと。わたしもかれらの中の多くの同志たちと同じく、本年四月、第五回臨時港地区党会議の決議にもとづいて同盟と統一し、結集してきたものの一人である。だが、その時、われわれの発したアッピールも「共産党という名前だけでは前衛党になりえなかつたと同様に、われわれが共産主義者同盟と統一することのみをもつて自己満足に陥入つてはならない」と明瞭に指摘した通りわれわれはスターリニスト流に同盟を絶対化することなど統一のそもそもの最初から考えてもいなかつた。しかもわれわれは、強固なプロレタリア党を建設する目的をもつて主体的に結集してきたのであり、単に世界革命に同調したからだけではないのだ。それ故にこそ、プロレタリア党建設のための斗争をあいまいにする同盟内の一切の理論と思想にたいする仮借なき斗争をおし進めることは、基本的な任務であり、世界革命の旗をかかげたから同盟の基本的立脚点は正しいなどという絶対的観念論者、あるいは自己の組織を固定化するスターリニストにたいして斗うことは私自身の任務としている。

戦旗派結集のアッピールのなかでは「分裂の局面のなかで混乱し、同盟中央の機能の回復を叫びつづけるようなセンチメンタリズム」は組織論上におけるスターリズム以外のなにものでもないと指摘しておいた。それは明らかに南部の一部の同志たちのことを念頭において書いたものであつた。

彼らが日共から分離しながらも自らの主体的変革をなしとげることができずにまたそのことを自覚すらもできないで同盟に結集した左翼スターリニストにしかすぎないことはその後の経過が如実なく暴露してくれている。スターリニストは日共－革命的前衛党－それに対する批判－革命的伝統の否定－スパイ、トロツキストという単純な図式をつくりあげ、トロツキスト**なるが故に**、アプリオリに間違つているという神話をもつて、革命的労働者を攻撃しつづけたし、今もなしつづけている私もその集中砲火を浴せかけられた。いままた同盟創立時の立脚点の検討－同盟の革命的伝統の否定、革共同**なるが故に**間違い－その秘密党員の潜入などという神話がいつの間にやらつくりだされ、それをもつてわれわれに非難が浴せかけられるのは単に不思議な奇縁として笑つてすませるほど単純な問題であろうか。かれら自身のなかに象徴的にあらわれているように同盟が左翼スターリニストの集団であることの自己暴露が、まさに同盟の崩壊とその危機そのものなのである。

われわれは其故にこそわれわれ自身の内部的強化をかちとるために分派を組織した。かかるスターリニストばりのデマゴギーの通用する同盟そのものを根本的につくりかえるために分派に結集したのである。それこそ今日におけるプロレタリア党建設のための斗争の基本的課題である。彼らが沼地へはまりこむことは自由だ。だがヒステリカルな叫びをあげて、沼地の中に沈んでいこうともそれは、われわれの関知したことではない。

（一面よりつづく）っている。

日共は「社共統一戦線」をかかげつつも、実際にはガランタミンと国民年金という、さらに卑俗な選挙戦術を中心とし、ピント外れの「対米従属」論を空転させている。しかも総評は総選挙にすべてを投入し、労働者階級の日々の斗争まで放棄している。

こうした状況から「低調」を伝えられ派閥選挙といわれる中で、自民党の攻撃に対決しているのは、安保斗争の中でつくられた、広範な、一般的な労働者人民の「左翼化」である、斗争は、大衆の中に反政府意識を深くうえつけ、自民党の大宣伝と社共両党の無能にかかわらず、革新陣営にかなりの大衆を依然として引きつけているのだ。

池田内閣の新政策にかくされた、資本の攻勢を暴露し、大衆を反政府陣営に動員することは、この戦線における共産主義者の任務である。

第二の戦線はどうか。

民社党は、この選挙によつて、公然たる政治勢力としての市民権を得るか否かの岐路に立つている。この党は、労働戦線の全面にわたつて、基幹産業を中心に産業構造の刷新と結合し、労働運動における「合理化」として資本家階級の期待と支持のもとに選挙にのり出している。だが、安保斗争をへた現在では、政治勢力としてはその無能を立証され、結党当時のブームもなく、これを打破るために組織労働者に対する資本家と一体となつた猛烈な攻撃を加えている。

それ故に、もし民社党は今度の選挙で敗北するならば、深刻な分裂と再編に入るだろう。

労働者階級にとつて、この党の息の根をとめることは今度の選挙の大事な課題である。共産主義者は、民社党を大衆の中から追放し、政治的に「死」を与えるために斗わねばならぬ。

第三の戦線はどうか。

日共はこの選挙に多くをかけている。安保斗争をはじめ、この期間のすべての斗争においてかなりの勢力をのばした。さらに党自身にとつて、トロツギストと修正主義者という、党内異分子を粛正し、宮本ラインの下に民族、平和路線で党ぞ純化し、大々的な党員拡大運動を行つて一層それを強化している。

総選挙における勝利（議席の増加、総得票数の増大）は、彼等に一層の自信を与え、その「思想と理論」が正しかつたことの立証として使われるだろう。

これは労働者階級にとつてプラスだろうか。否である。

共産党の得票は、反政府票として数えることが出来る。

それを認めたうえで、われわれがこれを労働者階級にとつてプラスでないと断定する理由は、安保斗争をはじめすべてで示された日共の反革命的役割と、それを支えている民族主義と日和見主義の理論が、この票によつて特に正当化される（社会党の場合は、一般的反政府票と見られるが共産党の場合は明確に党への支持である）ためであり、それは労働者階級を誤らせ、その斗いを敗北させ、革命にむかつて進むうえに、最も有効な妨害物となるからである。われわれは、労働者の社民不信任と、より革命的左翼への支持としての日共支持の気持を十分認めつつも、日共がそれに価する党でないこと、社民と同様に打倒すべきものであることを説得し、革命的善意を自から裏切ることを止めさせねばならない。

この二つの戦線に登場する社会党はどうか。

かつて昭和二十七年の総選挙に、総評は左派社会党を支持して本格的選挙カンパニヤを斗い、五十八名の多数を当選させた。

それ以来、社会党は古くからの社会主義者と、この時の人々を中心に候補を立てており、民同はなお当時の方法を官僚的に続けているそこには、もはや労働者の代表という新鮮ささえまつたくみられない。

社会党の動揺と裏切りは共産党とは別の意味で労働者の中に明らかにされている。社会党はなんらそれに反省を加えぬのみか、自民党と同じ「地バン、看バンカバン」の選挙をやつている。彼等は、ただ人民の反政府票を、他の諸派が無力なゆえに一人じめし、その上にのつかつて「革新」政党の旗を振つているのだ。

われわれは「社会党」を支持し、これに投票せよと呼びかけることは決してしない。この党は改良主義思想をふりまき、常に斗争を日和見るからだ。共産主義者は社会党に反対し、その数い難い改良主義議会主義を暴露し、大衆の中でその影響をたち切ることを任務とする。

こうした原則的態度の上に立つて、労働者の「反政府」の票を集めるために、各選挙区の社党候補のうちで、最も労働者大衆に密着した戦斗的な候補に票が集められることを共産主義者は認める。それはあくまでも社会党支持ではなく、一般的反政府票である点を強化するために、すなわち自民党と民社党に反対する票であり、同時に社会党も共産党も支持しない票であることをいくらかでもはつきりさせるために社会党候補に投ぜられるのである。

共産主義者にとつては、選挙斗争は投票よりもそれを通じての革命的宣伝が問題である。その点で第四の戦線こそ最も注目し、力を注ぐべきである。

すなわち、選挙斗争とその結果いかんによつて、既成政党政派はいかに分裂再編成するか。それは安保斗争の中で生れた新しい活動家にどう影響するかである。

第一戦線－－革新陣営の勝利（議席の増加）は、大衆的左翼化、それの実体である活動家局を活気づけるだろう。同時に、その成果をめぐつて奪い合いがはじまり、いずれもその中で議会主義への幻想をますます高め、左翼化の持つている議会制民主々義の枠をさらにしめつけるだろう。

革新勢力の敗北は、敵の攻撃を強め、右からの巻き返しを激化させるだろう。同時に既成左翼の分解再編をさらに強力に敗北の程度によつて、暴力的にまでおし進めるであろう。それは資本攻勢の進展と結合し労働者階級を大きな試練に立たせることは必至である。

第二戦線－－民社党の進出は、（可能性は殆んどないが）全労攻勢を激化させせブルジョア民主々義右翼を勇躍させる。敗北は、民社党の深刻な分裂にまで到りかねぬ動揺となるだろう全労内部にもそれが波及することは必至である。

第三戦線－－日共の進出は、主流派－－、民族主義右路線を強化し、党内純化を強化するだろう。組合内等における公然活動－－もちろん民同の旗もちとしての－－も強まり、真の革命的左翼への党からの攻撃は激しさを加えよう。

もし日共が選挙に敗北すれば、すでに党内に積つている矛盾は一つの突破口を見出すかも知れない。官僚的圧迫をうけつづけていた内部の左翼は内部斗争の絶好の機を得るにちがいない。安保斗争の中で生れて来た活動家は日共への不信を示しつつも社共両党支持を反政府陣営の常識どおり支持しているが、社会党への不信を明らかにしつつも選挙としてはこれを支持し、革新陣営の躍進のために斗つている。又日共の進出を左翼化の表現として支持している向きも少なくない。

共産主義者は、これらに対し、原則的立場から説得し、この新らしい動きを、「健全に」のばさねばならない。

そのためにも、われわれ自身のプロレタリア党への基礎がためが不可欠なのである。